

国際フォーラムに参加して 池上 祥子

九州の田舎で英語からもすっかり遠ざかり、IC精神を静かに顧みる時間もなかなか作らずに時が過ぎてきました。IC活動に参加の方々の道徳的な日々の積み上げを思うと、フォーラム会場まで足を運ぶ勇気は全くありませんでした。しかしオンライン開催通知を頂いてその空気に触れてみようと思いました。

参加して改めてチャレンジしていることは、静かな時間を持つことです。

自分自身、周囲のことまで落ち着いて思うことができ、時の過ごし方が変わりつつあります。

天然ボケと老いが重なり少々落ち込むこともある5人の孫を持つお婆ですが、これからは「親となった我子と孫に何を残すか!!」

を念頭に静かな時間を大切に活かしていきたいです。

今回のフォーラム参加で世界中から同時に互いの考えを共有できることは素晴らしいと改めてインターネットの偉大さを感じました。

苺ハウスの冬支度で大忙しの時、ハウスの上で泥はねが付いたズボンで作業しながら、ポケットの中のiPhoneから

世界中を飛び回っての難民支援のリアルな話を聴けること、オンライン開催の有難さを痛感いたしました。

世界の国々、人々を近くに感じられるようになりました。

ICの教えや人々との出逢いに心から感謝し、「世界の平和は家庭から」を実践してまいります。

事務局はじめ通訳他関係の方々のご準備等誠に有難うございました。

信頼の構築には時間がかかると思いますが、身近に信頼のおける友人がいることは心強いことです。世界各地の友人との交流の一方、足元を見つめた地道な行動、この両方を大事にしつつ、現代社会の諸問題に向き合っていきたいと考えています。

皆様のご参加を歓迎いたします。



「人の優しさ」を感じた瞬間 中嶋 良樹

先日、テレビで見たのですが、ある大学の先生が、今の若い人に決定的に欠けているのが「本物の体験」であると気づき、40日間スペインのセビージャからサンティアゴ大聖堂までのツアー（巡礼？）を計画したそうです。費用は自費で単位取得にもならないのですが、一日25Kmひたすら歩くだけのツアーで学生12名が応募しました。

本当の空腹を体験してもらうため、食物の貸し借りは原則禁止したそうです。そして歩き始めるとやがて空腹になり、イライラして仲間の仕草が気になるようになって「みんな仲良く助け合って・・・」と言うような健前上の美しい状態は、自分が空腹の時には通用しないことを知るようになりました。

先生がおっしゃるには、人間は食糧や水が不足するとイライラして周囲に腹をたて、自分が生きていくためには仕方ないと正当化して、隣国を侵略するようになるという事実は、教室で40回話してもなかなか理解してもらえないそうですが、学生達はこの巡礼の体験を通じて理解できるようになったとのことでした。

日本の「お遍路」のように、「お接待」と言うボランティアによるサポートもなく、へとへとになってサンティアゴ大聖堂にたどり着いた時、「言ってはいけないこと、自分の体

力の限界、見てみぬ振りをすること、巻き込まれて正当化してしまうこと」などの厳しい、しかしある意味でムキ出しの本音ベースの体験をしたようです。

日本の恵まれた普段の生活では、体験できない自らの軟弱さを、非日常の海外でのツアー、またはお遍路のような体験をすることで見つめ、克服できるのではないかと思います。

私にも、似たような体験があります。私が卒業した東京農大の農業拓殖学科（現在の国際農業開発学科）は入学時に「新入生歓迎オリエンテーション」があり、夕方世田谷校門前を出発して、翌朝、本厚木の農場まで徹夜で歩き通してウトウトすると先輩のシゴキ棒で背中リュックを叩かれるという強行軍、恐怖の行進でした。

朝の7時頃、朝食の時間があつたのですが、私は半分眠りながら歩いていたのでお弁当の入ったリュックを何処かで落としてしまい、当時はコンビニもなくひどい空腹なのに食べる物が無い状態になってしまいました。すると、一人の先輩がスッと寄ってきておにぎりを2つくれたんです。人のやさしさに触れた思いでした。

極限に近い厳しい状況下での人の優しさは、一生残るものと知りました。

事務局からのお知らせ

今年も早や師走となりました。コロナ禍に振り回された1年であったと思います。

来る令和4年、2022年は、会員の皆様が見るく元気に存分に活動できる年となってほしいものです。

来年の定時会員総会は、3/26(土)を予定しております。

なお、事務局は12/27(月)～1/5(水)まで、年末年始の休みとなりますのでよろしくお申し込み申し上げます。（事務局）

Initiatives of Change
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

IC ニュース
NEWS
Vol.31

公益社団法人 国際IC日本協会

発行年月日 2021年12月10日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
バレ・エテルネル206号
TEL: 03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail: info@iofc.jp HP: http://iofc.jp
<International IofC> HP: www.iofc.orc

頒価 1部 200円

「第43回 IC 国際フォーラム」に思う 会長 矢野 弘典

「IC 国際フォーラム」は、今年で43回目を迎えました。ふり返りますと、第1回フォーラムが東京で開かれたのは1976年のことでした。今年で45年になります。その前年の1975年に日本におけるMRA活動が組織化され、国際MRA日本協会として発足しました。その後、1984年には社団法人化し、2012年には公益社団法人となりました。この間、2003年には組織の名称をMRAから国際IC日本協会と改めましたが、その精神は変わりなく今に引き継がれております。

初代会長に就任されたのは、経団連会長の土光敏夫さん（故人）です。その下で第1回フォーラムが開催されたのですが、私は土光さんから、準備・運営の手伝いをするよう言われました。そこで私は初めてMRAに接し、その高邁な精神と世界平和への献身的な行動、そしてそれを支える国際的な信頼の人的ネットワークを目の当たりにして、深い感銘を受けました。良い機会を与えて頂いたと、今も深く感謝しております。

日本で開かれる初のフォーラムとあって、運営の中心には相馬雪香さん（第4代会長、故人）、ノルウェイのイェンツ・ウイヘルムセンさんがおられました。私はお二人にはそこで初めてお目にかかり、MRAのイロハを教わりながら、フォーラムの準備と運営に当たったのです。そして、世界各国から参加された多くの素晴らしい方々との出会いがありました。今となっては故人となった方が多いのですが、各国との交流はずっと続いてきております。

昨年からのフォーラムはICT（情報通信技術）を活用したテレビ会議の方式を採用することとしましたが、そのお陰で、遠い日本に足を運ぶことなく、海外から多くの方々に参加できるようになったことを共に喜びたいと思います。

今年のフォーラムのテーマは、「意識の改革～みんなで築こう信頼の架け橋を～」(Empowering Ourselves as Trust Builders and Agents of Change)であります。世界はコロナに明け、コロナに暮れようとする狂瀾怒濤の1年でしたが、私たち一人ひとりには環境がどう変わろうとも変わらない、あるいは変えてはならない大切な役割があります。それは、人々の間に信頼関係を築き、意識の変革をもたらす担い手としての役割であります。

まさに、IC(MRA)の基本理念と言えるでしょう。その役割を果たすには、四つの道徳基準を日標に私たち自身が先ず成長変化するように努め、自分を磨き続け、多くの仲間と手を携えて、身の回りから始めて社会に影響を及ぼしていくことが大切だと考えます。

日本には、古くから語り伝えられてきた言葉があります。それは、「一灯照隅、萬灯照国」です。

8～9世紀を生きた高僧、伝教大師最澄の言葉とも言わ

れています。意味は、「一つの灯火（ともしび、Candle）は一隅（いちぐう）を照らすのみ、しかしそれが萬灯となれば国や世界を照らす巨大な輝きとなる」ということです。

大事なことは、他に頼り、他に求める前に、自分自身がたとえ小さくとも一隅を照らす一灯になるように努めることではないか、と私は理解しています。その影響は最も身近な家庭や友人から始まって、職場や地域に広がり、やがてそれが国や世界という社会全体に及ぶものではないでしょうか。

身近な人に信頼されない人が、社会に信頼されることはないと思います。一時は通用しても、決して長続きはしないでしょう。人の真価は、その言動に自ずから顕れてくるものだからです。口先だけで実行の伴わない人を、一体誰が信用するのでしょうか。

フランク・ブクマン博士が説いた、「相手を換えようと思ったら、先ず自分を変えなさい」というメッセージは、あらゆる争いを解決する鍵を握っています。人間関係の妙を、これほど明らかにした言葉は他にありません。洋の東西を問わず、時代を超えて生き続ける普遍性を持った言葉です。この機会にもう一度、お互いに噛みしめてみようではありませんか。

ところで、話は変わりますが、わが国の国会には、衆参両院を含め、超党派で組織された国会 IC 議員連盟があります。現在その会長を務めておられる方は、元官房長官で国際IC日本協会の特別顧問である河村建夫（かわむら たけお）氏ですが、先般10月の衆議院議員選挙には出馬せず、後進に道を譲られました。日本経済新聞は、選挙前に連日のように「引退議員に聞く」というインタビュー記事を連載しましたが、河村さんは10月19日の紙面に登場し、次のように語っています。「政治は最高の道徳たれ」と。IC(MRA)精神そのものを表す、とてもよい言葉だと私は思いました。なお、改めて申し上げるまでもありませんが、国際IC日本協会は政治的には中立であり、超党派の国際IC議員連盟とは、連携しながら活動しておりますことを、この機会に皆様にお伝えいたします。



本稿は、本年10月23日、24日に開催された「第43回IC国際フォーラム」での矢野会長による開会挨拶を、会長の承認を頂き「IC ニュース12月号」掲載用に、一部書き改めたものです。（事務局）

「IC ビジョン会議(仮称)の開催とその概要 副会長・専務理事 足立 憲昭

皆さまから要望のあった、「自由で開かれた話し合い」が毎月、オンライン開催されています。

◎進め方:「静かな時間」でチェックインし、最後に、感想を述べチェックアウトします。

IC 精神に沿った、そんな会議が継続しています。これまでの概要は、次の通りです。

第1回 開催日時:2021年7月2日 20時00分~21時50分

- ・批判がなく、ゆったりと心から話し合えた。
- ・正直に、自分が思っていることを述べ、みんながその話に、耳を傾けたことが、嬉しかった。
- ・「協会が財政的に厳しい」ことを共有でき、具体的な対策を考えるスタートとなった。

第2回 開催日時:2021年8月27日 20時00分~21時50分

- ・イベントをやるときは、言い出すだけでなく、全てをマネージメントする人が沢山必要である。
- ・「変えるべきもの」と「変えてはいけないもの」がある。そのことを共有することが重要。
- ・若い人たちの知恵を活かしていくために、「インターンシップ制度」を提案したい。
- ・協会のホームページを会員が自由に活用できるように、20代などの若い世代のスキルが必要。

第3回 開催日時:2021年9月28日 20時00分~21時50分

- ・変えてはいけないものは、4つの標準、静かな時間、シェアすること。
- ・変えるべきものは、組織の若返り。ホームページをカラフルに、会員が使いやすいようにする。
- ・ホームページをプラットホーム化し、デジタル化、次世代の参画と彼らに任せる。
- ・一対一のフォロー体制をつくる。インターンシップのスタート。

タート。メンターの大切さ。
第4回 開催日時:2021年11月01日 20時00分~22時00分

- ・国際フォーラムに、新しい人(若い人)が参加して、フォーラムの雰囲気が変わった。
- ・フォーラムの中の発言で、「なぜ日本のIC協会は、過去のアーカイブを見ることができない」。
- ・日中韓フォーラムの活動記録が事務所のファイルに保管しているだけで、活用できない。
- ・国際IC協会の致命的問題は、IT系(デジタル化)に大きく遅れていること。
- ・若い人を何らかの形で、協会に携わってもらいたいが、報酬を払えない。
- ・「論語と算盤」の「論語」は、強みだが、「算盤」がずっと解決できていない。
- ・協会事務所、事務局のあり方を見直して欲しい。コロナ禍で、どの組織も管理部門を見直している。



このような結果を受けて、会議とは別に「ホームページ変革ミーティング」がスタートした。(ビジョン会議から生まれた成果)

1. ホームページの変革:次世代に繋がり、会員が使いやすいホームページに生まれ変わる。(来春目標)
2. 継続的にホームページを運用する「ワーキングチーム」を担当理事、事務局に加えて広く会員から募集して、編成する。ご興味のある会員は、事務局にご連絡ください。

「第17回 東北アジア青年フォーラム」に参加して 鈴木 陽子

私は、今年の8月25日~28日にオンラインで開催された「第17回東北アジア青年フォーラム」に参加した大学1年生です。このフォーラムがオンラインで開催されるのは初めてのことですが、私が本フォーラムに参加するのも初めてでしたので、思いつくままに印象を記してみたいと思います。

まず、オンラインでのフォーラムでしたので、4日間に亘り1日当たり4時間のプログラムであり、従来のフォーラムに比べると参加者間の交流の時間は短く、限られたものであったかと思えます。しかし、主催の韓国MRA/IC協会の方々、例年に劣らないディスカッションや交流ができるような場を工夫して下さい、3カ国の参加者の気持ちが通い合えるような努力をして下さいました。

勿論、リアルで対面の場合と比較すれば、実際に感じることや学ぶことに制限はあるとは思いますが、例えば私が発言する際に、韓国、中国の参加者が激励のチャットやスタンプを送ってくれたりしたということがあって、日本人

同士のコミュニケーションでは感じないような温かみを感じました。オンラインならではの気持ちの交流があると思えました。

フリートークの時間には、3カ国それぞれの国の表現の仕方や言葉遣いの話題、また韓流、中国ドラマの話題など、様々な身近な話で盛り上がりました。

世界的に見ても、コロナ禍はまだ収まったとはいえませんが、こういうコミュニケーションの取りにくい状況であるからこそ、世界の若者は積極的に交流を図るべきではないでしょうか。国内に在るだけでは情報は偏りがちですし、偏見で相手を見ることにもつながりがちだと思います。

この経験を糧として、今後も世界の若者と交流を続けていきたいと思えます。

本稿は、「第43回IC国際フォーラム」における鈴木陽子さんのご発言を、ご本人の承認を頂き「ICニュース12月号」掲載用に書き起こし掲載したものです。

前ページの鈴木陽子さんのご寄稿にもありますように、本年8月に開催されました「東北アジア青年フォーラム」は、初めてオンライン形式で行われましたが、日中韓3カ国から60名ほどの若者が参加し盛会裡に幕を閉じました。

フォーラム終了後、韓国MRA/IC本部の車総裁から、国際IC日本協会の矢野会長及び成理事に対して感謝状が届きましたのでご紹介いたします。

MRA 世界道徳再武装(MRA/IC)韓国本部

成豪哲 理事様

多くのご助力をいただき、第17回東北アジア青少年フォーラムを全て終えることができました。非対面オンラインで実施したため惜しい部分が多くありましたが、3カ国60余名の参加者が積極的な参加と呼应の中で成功的に終えることができました。

国際IC日本協会の理事会に対して、矢野会長と全ての役員の方々の皆さまへ感謝の意をお伝えいただけましたら幸いです。

国際IC日本協会 矢野弘典 会長様

コロナウイルス(COVID-19)感染症が、いまだに韓国と日本で減ることなく懸念される中で、矢野会長の健康とご家庭のご多幸を祈念いたします。また、国際IC日本協会の全ての役員の方々の健康とご多幸を祈念いたします。

会長と日本協会の役員の方々の積極的な関心と後援のおかげで、第17回東北アジア青少年フォーラムが成功的に終わることができました。特に開会式に会長の祝賀メッセージは、映像を通じて、私のみならず日中韓参加者の60余名全員が感銘を受けました。繰り返し感謝を申し上げます。

一日でも早くコロナウイルスが終息し、我々全員の日常生活が正常に戻ることを望み、日韓両国民の相互訪問交流も早期に回復されることを心より望んでおります。

会長の配慮と激励に今一度感謝を申し上げて、健康と幸福を祈念いたします。

2021年8月31日
MRA/IC韓国本部 総裁 車光善 拝上

내가 변해야 이웃도 변하고, 나라도 변하며, 인류가 행복해 질 수 있다.

MRA 세계도덕재무장(MRA/IC)한국본부

성호철 이사님께,

많은 도움 주셔서 제17회 동북아 청소년 포럼을 모두 잘 마쳤습니다. 비대면 온라인으로 실시하여 아쉬움이 많았으나 3개국 60여명 참가자들의 적극적인 참여와 도움 속에 성공적으로 마무리하였습니다.

국제IC일본협회 이사님께 야노 회장님과 모든 임원님들에게 감사의 뜻 전해주시면 고맙겠습니다.

국제IC일본협회 야노 히로노리 회장님께,

코로나바이러스(COVID-19) 감염병이 아직도 한국과 일본에서 줄어들지 않고 있어 걱정인 가운데 야노 회장님의 건강과 가정의 행복을 기원합니다. 또한 국제IC일본협회 모든 임원님들의 건강과 행복도 함께 기원합니다.

회장님과 일본협회 임원님들의 적극적인 관심과 후원 덕분에 제17회 동북아 청소년 포럼은 성공적으로 마쳤습니다. 특별히 개최식에 회장님의 축하메시지를 영감을 통해 저 뿐만 아니라 한중일 참가자 60여명이 모두 감명을 받았습니다. 기쁨 감사할 드립니다.

하루빨리 코로나바이러스가 종식되어 우리 모두의 일상생활이 정상으로 되돌아오길 바라며 한일 양국민의 상호방문교류도 빠른 시일 안에 회복되길 진심으로 바랍니다.

회장님의 배려와 격려에 다시 한번 감사드리며 건강과 행복을 기원합니다.

2021. 8. 31.

MRA/IC한국본부
총재 차 광 선 배상

第43回国際フォーラム「意識の改革」振り返り 大胡 賀子

今年のフォーラムテーマは「意識の改革」でした。新しい流れを創るかのよう、能動的に動く若手の力が起こり、チラシを始め、フォーラム専用ホームページが出来上がり、アンケートが瞬時集計され、そして分析までされました。

20代~80代までの老若男女が切磋琢磨し、あちこちでZoom会議が行われ、多忙な1年をお過ごしいた事と申します。セッションごとに、グループで責任を持ち、全体へと共有し、皆がそれぞれ出来る事をこなしてきました。ラジモハン・ガンジー氏のフォーラム講演の中にございました、マハトマ・ガンジー氏(祖父)の言葉の引用に、『最後は最初に等しく、誰もが最下位になることも、首位になることもない』は、副題の「みんなで築こう信頼の架け橋」に繋がるように感じ、柳健次郎氏の名言、「大勢の人間の努力は一人の天才に勝る」が形となったように思います。

お陰様で両日ともに100名を超え、世界各国からも多くご参加頂き、ご参加のすべての皆さま、この場をお借りしまして改めて御礼申し上げます。

「今の自分を知り 意識が変わると 何がどう変わるのか?」は、民族学者の柳田國男氏によって見出された、日本人の伝統的な世界観、「ハレとケの表現が当てはまるように思います。ハレは非日常、ケは日常と解釈される事が多く、またケガレについては、ケ(日常)が枯れ、ハレ(非日常)によって清めたり、祓ったりする事によって、ケ(日常生活)の支障を整える方法があると解釈もされています。

日常生活(ケ)に、フォーラムのようなハレの舞台を作り上げる事や参加する事で得られる体験は、日常生活に力を

与えます。普段慣れ親しんだ言葉や振る舞いが、ハレで使う言葉や振る舞いによって、日常生活での見え方、心映え等も変わります。

心のケガレも静かな時間を持つなどで、小さい気づきが、やがては大きな変化をもたらす事に繋がります。よく、ご褒美や命の洗濯などの表現がございますが、日常生活で気づけなかった事も、非日常に身を置くことによって、意識も変わると申します。出来ない理由は外ではなく、内なる自分にあると改めて感じ、フォーラムのファミリーグループでシェアさせて頂きました。

多様性が叫ばれている昨今、一人ひとりの違った個性を無理に合わせるのではなく、違った力を認めてこそ補い合えます。自分が認めただけが自分の世界として現れます。アンドリュー・スタリーブラス氏の講演にございましたが、一人ひとりが貴重であり、一人ひとりの貢献が極めて重要とありました。

違うからこそが大事で、人は鏡のごとく、『あるがまま』と『ないがまま』を認め、自分を知って認めていく事が、本来の自分に還ることに繋がると申します。

「日本はアジアの灯台になり得る」と発信された、創始者のフランク・ブクマン博士の活動から節目の今年に、一期一会の有意義な場を共有くださり、改めて感謝申し上げます。

